

令和 6 年 2 月 21 日

教 育 長 様

研究コース	
B グループ研究B	
校園コード（代表者校園の市費コード）	
561155	
選定番号	B210

代表者	校園名 :	大阪市立本田小学校
	校園長名 :	今村 友美
	電話 :	6581-1531
	事務職員名 :	喜連 尋滋
申請者	校園名 :	大阪市立本田小学校
	職名・名前 :	教諭 信貴 香乃
	電話 :	6581-1531

令和5年度 「がんばる先生支援」研究支援 報告書

◇令和5年度「がんばる先生支援」研究支援について、次のとおり報告します。

1	研究コース	コース名	B グループ研究B	研究年数	新規研究（1年目）
2	研究テーマ	「主体的・対話的で深い学び」の視点からエージェンシーを育む ～自己調整学習の充実をめざして～			
3	研究目的	<p>VUCAと呼ばれる予測困難な時代に突入する中で、求められる教育の姿、目指すべき子どもの学びの姿も変化している。「次は何をするのだろう」と全て教師の指示を仰ぐような、受動的な姿ではなく、目標達成に向けて「こうしてみたい、ああしてみよう」と自分たちで考え行動する、主体的な学びの姿を大切にしていきたい。そこで必要になるのが、自ら社会に対してポジティブな影響を与えるために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力「エージェンシー」である。以上を踏まえ、次の2点を本研究の目的とする。</p> <p>1、自身の学習過程に能動的に関与する学習を指す「自己調整学習」の充実につながる授業デザインと評価の開発 2、教師である私たちが、学び続け、自らの社会に影響を与えられるようなエージェンシーを育み発揮するための研究のあり方の探究</p>			
4	取り組んだ研究内容	<p>いつ、何のために、どのようなことを実施したのかを具体的に記載してください。（MSゴシック 9.5pt イント）</p> <p>①自身の学習過程に能動的に関与する学習を指す「自己調整学習」の充実につながる授業デザインと評価の開発</p> <p>エージェンシーを育む授業をデザインしていくために、まずは4月からZimmerman(1986)による自己調整学習やその中で柱となる動機づけ、メタ認知、学習方略の理論について整理を行った。具体的には、Edward L. Deciら(2017)による自己決定理論、三宮(2008)によるメタ認知、野原・森本(2022)などによる可視化についての読書会や研修会などを通して、先行研究や実践などから私たちが目指す授業デザインに必要な理論を整理した。そこで、私たちが整理した理論をまとめるとともに、参加者と理論を共有することで、本研究がより広がり深まるように、7月ごろから10月ごろまで本研究の実践を裏付ける理論の冊子を作成した。（作成冊子は別途添付。）</p> <p>それらの理論をもとに、エージェンシーを育む授業をデザインするとともに、各教科・領域において授業実践を重ね、授業者がそれを評価できるように「実践報告」としてまとめた。（実践報告は別途添付。）また、学習者の自己調整学習が円滑に行われるようにするため、学習指導案のデザインを行った。「自己調整学習をどのように評価するのか」や、「学習者のAARサイクルを単元の中でどのように想定しているのか」「そのために授業者は何をいつどのように支援するのか」という自己調整学習の側面と教科の本質的な学びが一体になるように指導案をデザインしなおした。（学習指導案は別途添付。）</p> <p>これらの研究・実践の成果物については立命館大学 野原博人教授に指導助言をいただくことで、評価と改善につなげた。また、令和5年11月30日・令和6年2月9日に研究発表を行い、その際にこれらの研究・実践及び成果物を参加者にも共有し討議を重ねた。</p> <p>②教師である私たちが、学び続け、自らの社会に影響を与えられるようなエージェンシーを育み発揮するための研究のあり方の探究</p> <p>週に1回以上、オンラインも含めて読書会を開催するとともに、8月に日本理科教育学会 全国大会、2月にお茶の水女子附属小学校 など計8校への研究発表会の参加をすることで、全国的な研究の動向に注視するとともに、本研究に関する先行研究について学びを深めた。また、8月には日本理科教育学会全国大会や11月には日本理科教育学会 近畿支部大会で学会発表を行うとともに、自己調整学習についての理論をまとめた冊子の執筆を行った</p>			
5	研究発表等の日程・場所・参加者数	日程	令和 6 年 2 月 9 日	参加者数	約 40 名
		場所	大阪市立本田小学校		
		備考	令和5年11月30日 : 第一回研究発表実施		

		<p>大阪市教育振興基本計画に示されている、<u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上および教員の資質や指導力の向上</u>について、申請書に記載した検証方法から得られた結果と、それらからの結果に基づいた考察を、具体的に記載してください。</p> <p>【見込まれる成果1】</p> <ul style="list-style-type: none"> <input checked="" type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上 <p>児童の資質・能力（学びに向かう人間性）が涵養される。低学年では自分自身の動機を大切に学習することで、学習に対して肯定的な感情を持つことができる。また、高学年では、学びに向かう人間性である「粘り強く学習に取り組む態度」や「自らの学習を調整しようとする態度」及び問題解決能力を涵養することができる。</p> <p>『検証方法』</p> <p>主体的な学習に取り組んだ単元で児童へのアンケート項目「楽しみながら勉強することができた（低学年）」「うまくいかなかったとき、先生や友達に相談したり、やり方を変えてみたりした（高学年）」に対する肯定的な回答を、70%以上にする。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>各アンケート項目について、4件法でアンケートを行った。項目「楽しみながら勉強することができた」について、肯定的な回答は約95%となり、また、項目「うまくいかなかったとき、先生や友達に相談したり、やり方を変えてみたりした」について、肯定的な回答は約85%となった。以上の結果より、低学年では学習の中で児童自身の動機を大切にすることで、学習に対して肯定的な感情を持つことができているといえる。また、高学年では、児童自身で自分の学習を調整しながら粘り強く問題に取り組むことができたといえる。他にも「見通しをもって学習できましたか？」の質問では87%、「やってみた後うまくいったか、うまくいかなかったかを考えましたか？」の質問では、88%の児童が肯定的な回答をしている。そのため、全体を通して自己調整の価値を感じながら試行錯誤する姿は見られた。しかし、どの項目でも10%前後の否定的な回答があったことも事実である。その児童にもどのようにアプローチしていくのかが今後の課題となるだろう。</p> <p>【見込まれる成果2】</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上 <p>研究発表会参会者が「目指すべき教育の姿とはどのようなものか」について考えられるような研究会を開催し、「教材」や「理論」在りきではなく、まず初めに「子ども」在りきで授業をするとはどういうことなのかについて研究会のメンバーと共に考え、自分の実践とつなげることができると考える。</p> <p>『検証方法』</p> <p>研究発表会参会者にアンケートを実施し、項目「自分自身の教育を見つめ直し、どのような教育が良い教育なのかを考えるきっかけになった」「自己調整学習の考え方方が子どもの主体的な学びを保証するヒントになった」「動機を大切にする学習が大切だと感じた」の割合を85%以上にする。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>各アンケート項目について、4件法でアンケートを行った。</p> <p>項目「自分自身の教育を見つめなおし、どのような教育が良い教育なのかを考えるきっかけになった」について、肯定的な回答は100%となり、その中でも最も肯定的な回答は約83%となった。</p> <p>項目「自己調整学習の考え方方が子どもの主体的な学びを保証するヒントになった」について、肯定的な回答は100%となり、その中でも最も肯定的な回答は約90%となった。項目「動機を大切にする学習が大切だと感じた」について、肯定的な回答は100%となり、その中でも最も肯定的な回答は約97%となった。以上の結果より、研究発表会参会者が研究会メンバーとともに「目指すべき教育の姿とはどのようなものなのか」について考え、実践につなげるきっかけになったといえる。また、本研究がきっかけとなり、他校からの研修講師依頼や問い合わせが複数あったことも、大阪市の教育へ寄与するきっかけとなった。</p> <p>【見込まれる成果3】</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上 <p>自己調整学習の予見・遂行・自己省察の3つの段階において、どの学年でどのような方略を行ったかの一覧や、「Pintrich & Groot(1990)による「Motivated Strategies for Learning (MSLQ)」を援用し、本研究会が志向する小学生を対象とした自己調整学習に即したアンケート項目を作成することで、参加者が主体的な学びにつながる自己調整学習についてイメージをもち活用することができると考える。</p> <p>『検証方法』</p> <p>研究発表会参会者にアンケートを実施し、項目「自己調整学習に即したアンケート項目が授業実践において役に立ちそうだ」「自己調整学習の方略一覧が役に立ちそうだ」「自己調整学習がどういうものか簡単なイメージがもてた」と答える割合を85%にする。</p> <p>〔検証結果と考察〕</p> <p>各アンケート項目について、4件法でアンケートを行った。</p> <p>項目「自己調整学習がどういうものか簡単なイメージが持てた」について、肯定的な回答は100%となり、その中でも最も肯定的な回答は約72%となった。</p> <p>以上の結果より、研究発表会参会者が研究紀要や授業での子どもの姿を通して、「自己調整学習とはどういうものなのかな」について考え、その理論と実践のイメージを持つきっかけになったといえる。また、第一回研究発表では49人、第二回研究発表では37人の参会者が集い、児童の学びの姿を通した討議を重ねることで、自己調整学習についてのイメージを深めることができた。さらに本研究成果を校内外に周知できたことは、大阪市全体の教育への寄与につながった。</p>
6	成果・課題	

研究コース

B グループ研究B

選定番号

B210

代表校園

大阪市立本田小学校

校園長名

今村 友美

		【見込まれる成果4】
		<input type="checkbox"/> 子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上 <input checked="" type="checkbox"/> 教員の資質や指導力の向上
研究会に所属する教員がエージェンシーを発揮するためのプラットフォームとなり、一人一人が自立した学び手となり、社会に対して自らエージェンシーを発揮することができると考える。		
『検証方法』		
学会発表、研究論文を研究メンバーから合計5本以上作成し、発表する。		
6	成果・課題	<p>〔検証結果と考察〕</p> <p>今年度、研究会に所属する教員が行った学会や研究論文の発表を以下にまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本理科教育学会 全国大会発表 1本 ・日本理科教育学会 近畿支部大会発表 2本 ・日本教育公務員弘済会大阪支部研究論文発表「1枚ポートフォリオを活用した体育科授業実践～自ら課題を設定し、主体的に運動に関わる姿を目指して～」 ・「月間 理科の教育」における「理科の壇」での文書掲載 2本 <p>今年度は特に理科を中心に発表を行い、研究会メンバー自身が社会に対してエージェンシーを発揮することができ、研究成果は大阪市内外問わず、多くの教員に対して発信できた。来年度には教員それぞれの専門性を生かし、より様々な教科・領域で発表できるようにしていく必要がある。</p>
	【研究全体を通した成果と課題】	研究発表会等で使用した資料や研究冊子から引用し、端的に記述してください。
1. 新規研究（1年目）	※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する	今年度の研究の成果としては主に3点あげられる。1点目は自己調整学習についての理論冊子を作成できることである。冊子を作成することによって、のべ86名の参会者の方々と共に「目指すべき教育とは何か」について考えることができたことに加え、研究会メンバーそれぞれがそれについて深く考えながら理論と実践を往還させることができた。2点目は教師である研究メンバー自身が学び続け、エージェンシーを発揮したことである。研究会メンバーが様々な教科・領域で発表や研修講師を行っており、社会に影響を与え続けることができたといえる。3点目は児童と共に自己調整学習の意味や価値を考えながら学習することで、児童の学習に対する姿が変容したことである。研究会メンバーの学級児童に対して行ったアンケートでの項目「1時間の学習の中で、見通しをもって学習することはできましたか？」では肯定的な回答が約87%、「友だちの考え方を自分の学習に役立てることはできましたか？」では肯定的な回答が91.8%であった。これらの結果からも、児童自身が他者との学びの価値を実感し、自己調整しながら学習していることがわかる。
2. 継続研究（2年目）	※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する	次年度に向けての課題として、「自己調整学習を行っている児童をどのように評価していくのか」という点が挙げられる。今年度も「指導と評価の一体化」の観点から、「学びに向かう人間性等」の評価について検討を重ねてきたが、未だ不十分な点も多い。来年度では引き続き立命館大学 野原博人教授に指導助言をいただきながら、より緊密な「指導と評価の一体化」を目指していく。
3. 継続研究（3年目）		
【代表校園長の総評】		
1. 新規研究（1年目）	※継続研究2年目以降は1年目の記載をコピーして貼付する	本グループは、「自己調整学習」の充実につながる授業デザインと評価の開発（実践研究）と、エージェンシーを育み発揮するための研究のあり方の探究（理論研究）の2つを柱として研究を進めてきた。研究理論（エージェンシー、自己調整学習、自己決定理論、メタ認知等）を冊子にまとめるとともに、2回の公開授業研究会を通して、参加者に自己調整学習についてのイメージを持ってもらうことができたことは、大きな成果である。理論研究を裏付ける実践研究を行うことができたと考える。
2. 継続研究（2年目）	※継続研究3年目の場合は、2年目の記載をコピーして貼付する	VUCAと呼ばれる時代、エージェンシーを発揮し、個々の幸福の実現によって社会全体の幸福を実現していくためにも、自己調整学習は価値あるものと考える。次年度も継続して研究を深めていくように希望する。

	3. 継続研究（3年目）	